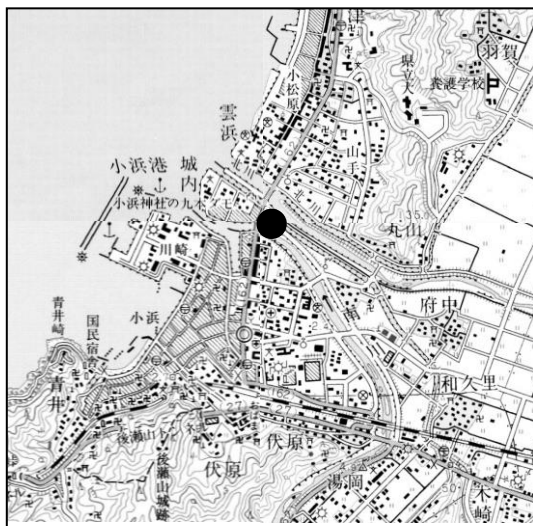


おばまじょうあと
20. 小浜城跡

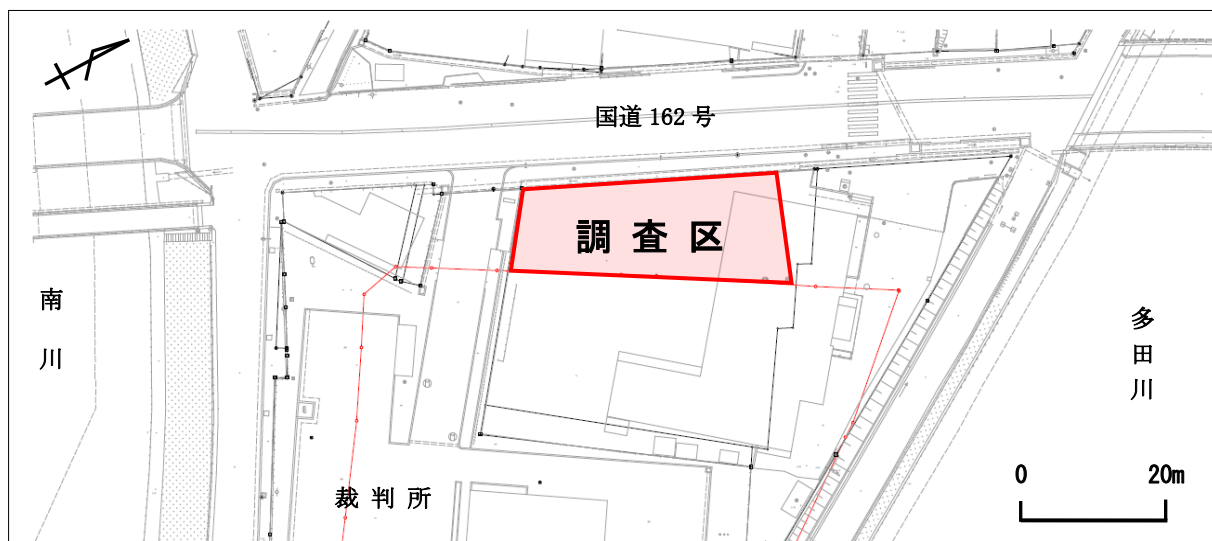
所在地：小浜市城内1丁目
調査原因：一般国道162号道路改良事業
調査期間：平成30年8月1日～11月30日
調査主体：福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
調査面積：340㎡
時代：江戸時代



位置図 (S=1/50,000)

調査の概要 小浜城は、北川・多田川と南川の河口に挟まれた場所に築かれた水城(みずじろ)です。慶長五年(1600)の関ヶ原の合戦後、小浜藩初代藩主である京極高次によって、それまでの後瀬山(のちせやま)城から雲浜(うんびん)の地に城が移され、翌年から築城が開始されました。小浜城は京極氏二代の時代では完成しませんでした。寛永十一年(1634)、徳川家光の側近の酒井忠勝が藩主となった後、正保二年(1645)に完成しました。歴代の藩主によって明治維新まで修理・維持されてきましたが、明治4～7年にかけて、出火や天守の解体などにより大部分が失われました。現在は、本丸跡に酒井忠勝を祀る小浜神社が建っています。

今回、国道162号改良工事のため、340㎡の面積を対象に保育園跡地を発掘調査しました。江戸時代後期の小浜城絵図を見ると、調査箇所は三の丸に該当し、米蔵や粃蔵および関連する役所が描かれています。過去に行われた発掘調査で、今回と同じく三の丸に関するものには、昭和50年代に小浜城跡発掘調査団が、河川改修や裁判所建て替えのために行った調査で四番米蔵を確認した例や、平成9～13年に小浜市教育委員会が、城域内各所で行った下水道工事に伴う調査で九番米蔵と想定する礎石を確認した例があります。

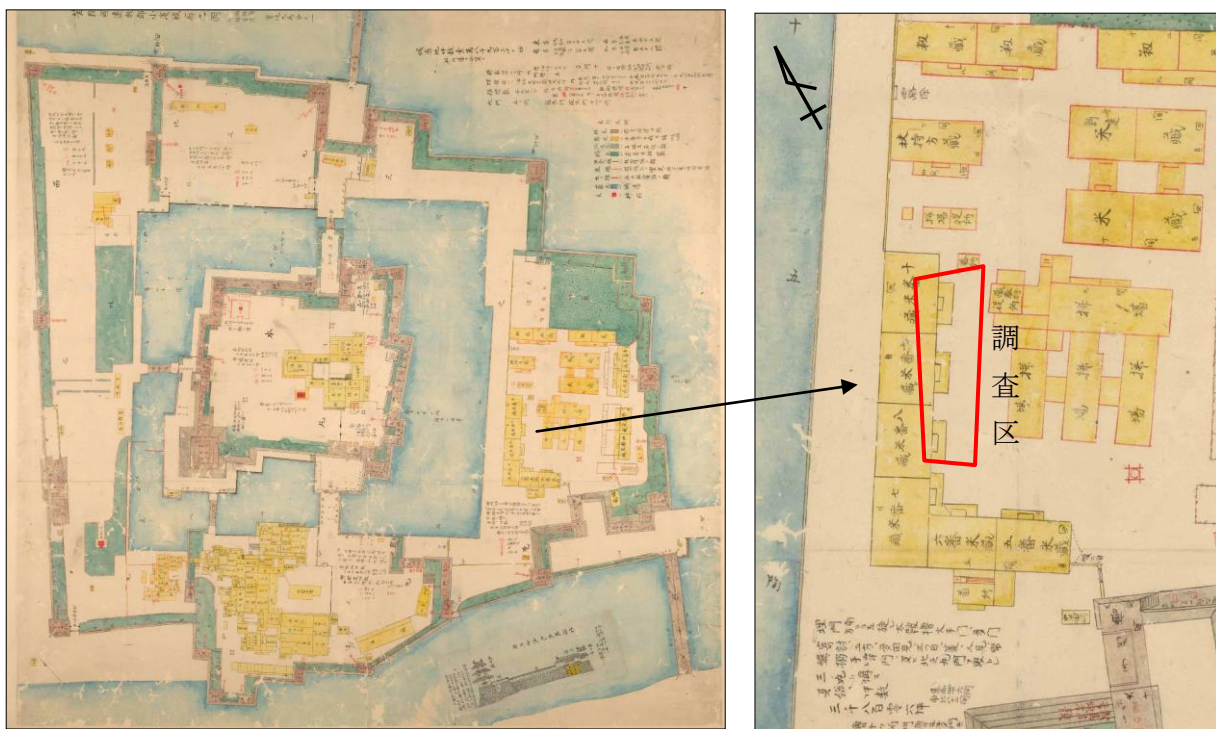


調査区位置図 (縮尺約 1/1,000)

遺構 調査の結果、花崗岩を使用した3棟分の蔵の基礎部と各蔵の出入口となる石段を確認しました。小浜城絵図と見比べると、調査区の南から八番米蔵、九番米蔵、十番米蔵に該当するようです。3棟が一続きの建物であったことも絵図と共通しています。調査では九番米蔵と十番米蔵の間を仕切る基礎部を確認しており、1棟の蔵の規模は長さ約12m(1間を約1.8mとすると6間半)、奥行きは過去の調査例から約7.5m(4間)と推定できそうです。石段の規模は幅約4.5m(2間半)、奥行き約2.8m(1間半)です。八番米蔵の石段は2段分が残っていましたが、本来は3段以上積まれていたことでしょう。多くの石の表面には、目的の大きさに割るための矢穴の痕が残っていました。基礎部に使われた石は、大きなものでは縦40～50cm、横60～80cm、長さ80～100cmの大きさで、90cm程度の高さに1～2段積み上げています。米蔵の建設当初は地上に60cm程度が出ていたようですが、その後、土砂を盛って道路面を直す工事を複数回行ったため、少しずつ埋もれていきました。また、蔵を建てる時、石の下に胴木を設置するなどの地盤工事は行わなかったようです。

遺物 遺物は、大量の瓦の他、陶磁器、羽口(はぐち：鍛冶場で、送風装置に付けて風を送る土製の管)、鉦滓などが出土しました。瓦には、酒井家の家紋の一つ、「井」の印がある瓦もあります。陶磁器の出土量はごく少量でした。羽口は、石を加工する工具が傷み、修理をした時に使われた可能性があります。これらは主に18世紀から19世紀後半のものです。

まとめ 過去に行われた調査に加え、新たに小浜城三の丸に建っていた米蔵3棟の正確な位置と規模を知ることができました。小浜城は、現在目にすることができるのは本丸跡のみですが、地下には絵図に描かれた通りの遺構が比較的良好に残されていることが予想されます。発掘調査は、引き続き来年度まで行う予定です。今後の発掘調査を通して、小浜城の姿がさらに明らかになっていくことでしょう。(野路昌嗣)



『小浜城城郭之図』(江戸時代後期)(小浜市教育委員会・福井県立図書館提供)に加筆



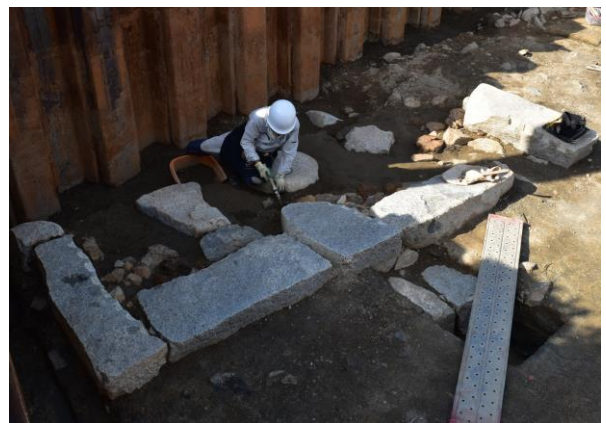
調査区全景（南東から）



米蔵基礎部石垣（東から）



八番米蔵の石段（北東から）



八番米蔵の石段検出作業（南東から）



矢穴の痕



米蔵の仕切り部分の基礎（北から）



小浜城遠景（北東から）



『小浜城下鳥瞰図』（小浜市教育委員会・福井県立図書館提供）